

起業家の履歴書

第12回

夏目房之介

夏目房之介-文・イラスト
小川よしのぶ-写真



なつめふさのすけ

○漫画家・イラストレーター
1950年東京生まれ。
青山学院大学文学部卒業
著書「あっぱれな人々」(小学館)、
「不肖の孫」(筑摩書房)など多数。
夏目漱石の孫。

株式会社ガイアックス 代表取締役 上田祐司 氏

とりつく島の無い
面白い人である。

ガイアックスの上田祐司さんは、1974年、大坂生まれの27歳。中学から同志社に入り、そのまま同志社大学経済学部に進学。卒業した97年、起業を志す独立心の強い者しか雇わないというベンチャーリンクに入社。翌98年10月には退社して独立準備を始め、99年3月有限会社ガイアックスを設立、5月に株式化した。現在、ネット上のコミュニケーションの企画、開発、運営、サポートのサービスで国内最大規模だそうである。やることが、むちゃくちゃ早い。

で、上田さんとはどういう人かというところ、取材者として一言で言えば「とりつく島のない人」である。資料には、高校時代から30種以上のアルバイトをしたとある。マクドナルドを手始めに共同通信の世論調査、ホテルの住み込み、英会話教材のセールス、スノーボードのインストラクター、焼きいも屋などをやってビジネスに興味を持ったという。

「何かしたいと思ったんじゃないですか？」と、他人事みたいに一言。「何でマクドナルドを？」と聞けば、「とりあえず、すぐできますから」と、そっけなく、気の早い早口ですつと答える。

これに引いては取材にならぬので、「そもそも、そんなにアルバイトをした動機って何なんですか？」と食い下がると、「うーん、何か仕事があったってことじゃないかと思いません」と、まるで独り言みたいにボソリ。

明らかに、この種の受け答えに興味がないのである。そこで、「その場合の仕事ってというのは社会に実際にかかわる、っていうような意味ですかね？」と聞くと、「どちらかというと、少しく考えから、」

「大学でクラブをやりたいって方が分からない。基本的に意味がないでしょ」と言う。

むろん、こういう人のインタビュはやりやすくない。しかし、

逆に言えば極めてユニークな人である。こちらも、そういう部分に興味を感じてしまおうタッチなので、上田さんは迷惑だろうが、しつこく聞く。

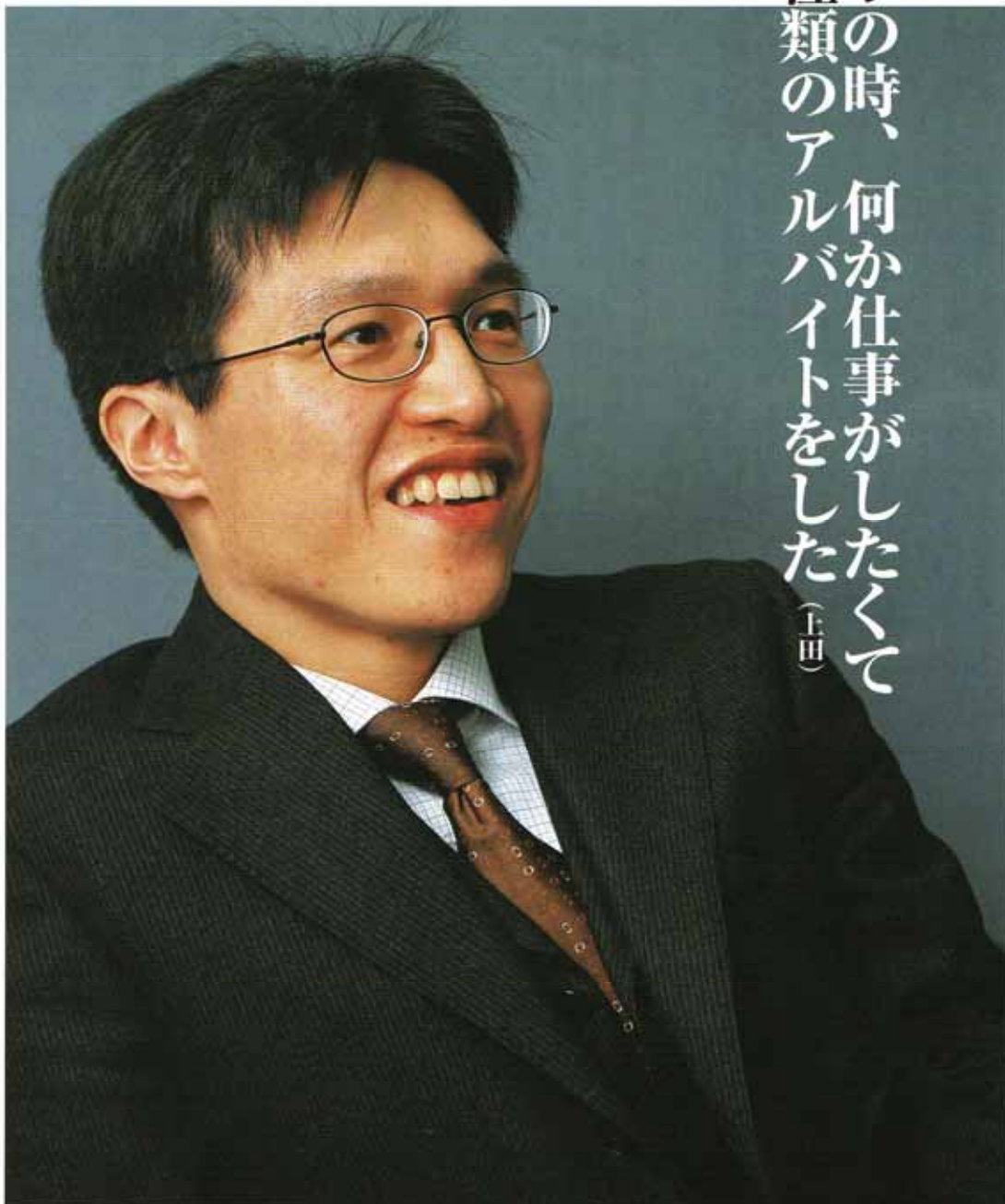
「それって、つまりクラブをやっても実社会的には意味がない、ってことですか？」

「んー、どっちかっていうとそうですね。何もやらないよりは、やった方がいいですけど」

自分に意味がないことに時間も気も使いたくない

おそらく、はたで聞いていた編集部の人にはけっこうハラハラしたろうと思う。何しろ、聞く方も答える方も間をあげてポツリポツリと話し、一向に話が盛り上がらないのだから。

しかし、私は次第に目星が付いてきていた。この人は、興味の無いこと、自分から見ても意味のないことには時間も気も使いたくないし、使えない人なのだ。おそらく若いころからこの生き方を徹底してきたのだろう。それを他人からどう思われようが、全然気にならない。はなから関心がないのだ。



大学の時、何か仕事をしたくて30種類のアルバイトをした(上)

私が「しかし、学校の先生なんかからすれば相当やりにくい生徒だったんじゃないかと思えますけど」と感想を言うと、

「んー、でも、私立だし、けっこう放任でしたよ」と言う。たぶん、当時の周囲の反応などにも関心がなかったのだと思う。何しろ学校の友人どころか、親戚、家族にすら、あまり興味がなく、

父上の誕生日すら知らないのだ。そもそも誕生日を祝ったりもなかったという。日本人としては、かなりユニークなタイプではなからうか。

自分か社会に必要なかどうかが判断の基準になっている (夏目)

実は私自身にも上田さんほどではないが、同じ傾向がある。中学から大学まで私立で、学校の友人とのちのちまで付き合ったりせず、親戚のこともいまだにだれがだれだかよく分かっていない。

直観的に自分の好きな方向があつて、それ以外は全部無駄のように思える感じは分らないではない。ただ、私の場合、そういう生き方をしていううちに、逆に無駄に見えることはばかりを面白がるような方向にきてしまった。

ダラダラしゃべるのは嫌い ディベートなら何時間でも

対話の途中で「それじゃ、こういう取材は苦手ですね？」と聞く

「そうですね」と率直に苦笑いした。

「ダラダラしゃべるのは嫌いですね。何かのテーマについてのディベートなら喜んで何時間でもやりますし、そもそも熱いですよ。商談は好きですけど、それ以前の雑談とかは苦手ですね。飲み会なん

かで騒ぐこともほとんどないし、食事も一人の方が楽ですし」

私も打ち合わせ、会議と称して無駄な堂々巡りばかりする場が大嫌いだ。雑談としての雑談は好きだが、目的がある場合は効率的にそこに行きつくように仕切りたくなる。

ただ、上田さんと私の違いは、彼が「効率性」そのものに快楽や興味を持っているようなのに対し、私の場合は、はるかに非効率な「人間」そのものに引き寄せられる点にある。だから、ばか騒ぎは大好きだ。一般的な分かりやすい比喻を使えば「理工系と文科系」と言われる資質の違いかもしれない。

給料のほとんどを費やし フリマなどで経営の実験

ガイアックスのオフィスは、まことにシンプルで、先端的イメージを演出するしゃれっけなどまるでない。かろうじて入口付近にある観葉植物も「あんまりなので置いてみました」的な印象だ。上田

さん自身も、必要なので背広を着ていますという感じで、おしゃれっ気はない。

こう書くとながティブな印象になるかもしれないが、私の目にはそれが上田さんという人のユニークさ、面白さを反映した「愛敬」のように見えた。いや、記事のために無理して言っているのではない。ほんとに、この人は面白いのだ。ただ、その面白さを人に伝えるのは難しい。

ベンチャーリンクに勤めていたときに、上田さんはカブセルホテルに泊まりこみ、そこから出勤し、給料のほとんどを後輩に渡し、フリママーケット、アクセサリー販売、焼芋屋などをさせて「経営」の実験をしていたという。そんなこと、普通思いつかない。いや、思い付いてもやらんと思う。

けれど、いろいろ話を聞いてみると、この行動も「この人ならそうするだろう」と思えてくる。例えばどんなゲームが好きだったかとたずねると、

「モノポリーは好きですね。サイコロでやる以外に交渉があるじ

ガイアックスという会社

創業以来、インターネット上のコミュニティという分野に特化し、提供先企業ブランドでサービスを提供するというOEMサービスを展開。現在、コミュニティを中心とする戦略立案・企画・開発・運営・サポートと一貫したソリューションを提供している。個人ホームページサービス、インスタントメッセージャー、グリーディングカード、ウェブメール、クラブサービスなどのプロダクトを次々と開発・パッケージング化することにより、低コストでの提供に成功している。

昨年には韓国ナランバーワンのポータル企業、ダウムコミュニケーションズ社とのジョイントベンチャーとして株式会社ダウムジャパンを設立。さらに国内初のコミュニティ系インターネットカフェを手がける株式会社ガイアックスカフェを相次ぎ設立した。

現在、コミュニティ提供先は、NTTコミュニケーションズ、日本テレコム、シャープ、パナソニックエレクトロニクス、関西銀行など大手企業を中心に300社を超える。最近では、コミュニティを生かして地球環境や社会的貢献を目指した「ガイアムーブメント」と呼ぶ活動も展開。リアルコミュニティによって支えられているというガイアシンフォニーの上映会を11月より毎月開催するなどの活動をしている。



株式会社ガイアックスのWebサイト。
<http://info.gaiax.com/>



やないですか。何でこれしないかなあ、とか得意ですね。やったことありますか？」

「こういうときだけ、目に光が走る。ほかに、どちらかといえばマージャー、大貧民などのトランプ・ゲームは嫌いではないという。駄目なのはロールプレイング・ゲーム、シミュレーション・ゲーム、パチンコだ。ものすごくはつきりしている。要するに一人で完結してしまうゲーム、もしくは「相手」があってもフィクションでしかないゲームは駄目で、対人的な交渉があるものが好きなのだ。」

「なので、子どものころからゲームボーイもファミコンも持ったことがない。代わりに、小学校のころから親が与えてくれたパソコンでプログラムを組み立てて遊んでいた。」

「バックマンやブロック崩しくらいは、すぐできちゃうんですけど」
根っからの文系でパソコン音痴の私は驚くしかないが、上田さんにとっては普通のことであつたらしい。それにしても小学生の上田さんにパソコンを与えたご両親は、一体どんなつもりだったのだろうか。

「教育にいいと思ったんじゃないですか？」

上田さんは簡単に言っただけ

が、あるいは興味のあるものもないものの落差があまりにも激しい息子に対し、ご両親がそれなりに考えて与えたものだったのかもしれない。

「要するに組み立てが好きなんです。ブロックで組み立てるのは好きだったけど、決まったものしかできないプラモデルはやらなかった」

「おそらく、生まれつき、はつきり引かれた「好き嫌い」「興味のある、ない」の線引きは、ある時点から「自分が社会に必要かどうか」という判断基準になり、それを遂行するための「効率性」が上田さんのモノサシとなったのだろう。」

徹底した生き方を示す 効率性は愛であるの意味

大学に入ると、1年の4月の段階で最小限度の単位と出席日数を計算し、友人や先輩の協力を得て過去問やノートを集めた。代返を手配し、落とす科目を決め、あとは1年ごとに微修正しながら、最大「効率」のいい形で卒業する。

「社会に出たとき「必要」と思われたもの、例えば趣味や知識について「演劇、美術、映画、読書、音楽」と、おのおの月一回とかの「ルマ」(！)を決めて鑑賞した。が、現在は「ほとんど覚えていな

ITキーパーソン

い

海外旅行も「ノルマ」にして、バックパッカーで40〜50日、中国、チベット、ネパール、インドなどを回ったりしたが、「まあ、やらなくてもよかつたんじゃないですか」などと軽く言っただけ。同じ理由で震災のボランティアにも行った。

「大学行くことって何も意味がないじゃないですか。バックパッカーも大学も、僕には同じレベルなんです。大学くらい出とかなきゃって程度です。ボランティアをやった意味は、基本的に社会貢献と、自分に裁量があるかどうかですね」

上田さんにとって「必要」で「効率」を求めるものは、自分が興味があること、そして社会に役立つことに、はっきりと集約されるようだ。上田さんの資料の中で、一つ目を引いた彼の言葉があった。

「効率は愛である」

この意味を問うと、上田さんは取材中で最も熱く語った。

「これは、すごく大切なことだと思います。ポランティアとって社会的にいいことだと思わなくていいんです。でも効率が悪いんです。役所が金出してコストも利益も考えないってことになると、例えば水っていうリソース

を最適に生かすって形にならない。利用者がどうしたら最も喜ぶかって形になっていけないんです。

1000円の商品を作る場合に、元手が50円なのか、100円なのかでは、前者の方が利益率が良くて、しかも資源が少なくて済みますから地球にやさしい。この競争の結果、後者は倒産しないとはいけません。そうしないと効率良くならない。ポランティアの場合、キャッシュで利用者の効率が表現されないとところが問題なんです」

これについて意見はいろいろあるだろう。が、ポランティアが無償の善意の別名のように思われている風潮は、私もいいとは思わない。恒常的なシステムにならないからだ。

それはともかく、みんな横並びのななあなあでことを運びたい「日本的」システムではやっていけないような局面では、上田さんのような人の馬力が必要になるんだらうと思った。あー、ほんと、面白かった。



ふりがな	うえだ ゆうじ		
氏名	上田 祐司		1974年 9月 12日 生まれ (満28歳)
職業	株式会社ガイアックス 代表取締役		

年	月	学歴・職歴
1974	9	大阪府茨木市に生まれる
1987	3	茨木市立茨木小学校卒業
1990	3	同志社中学校卒業
1993	3	同志社高等学校卒業
1997	3	同志社大学卒業
1997	4	株式会社ベンチャー・リンクに入社 事業開発本部BLD事業部に配属
1998	10	株式会社ベンチャー・リンク退社。同僚の山根（現副社長）とともにインターネット上でグリーティングカードサービスの実験を開始
1999	3	有限会社ガイアックス設立、代表取締役に就任。コミュニティーOEM事業を開始
1999	5	株式会社ガイアックスに組織変更

得意な学科	数学・物理		起業の動機 効率の良い世の中を作るため		
趣味	読書				
好きなスポーツ	スノーボード				
現住所	東京都渋谷区	家族	なし		
自慢の一品	物を持たない主義のため、なし			年収	非公開